

主はモーセに言われた。「あなたも、あなたがエジプトの地から連れ上った民も、ここから上って行って、・・・『これをあなたの子孫に与える』と言った地に行け。わたしはあなたがたの前に一人の使いを遣わし、・・・乳と蜜の流れる地にあなたがたを行かせる。しかし、わたしはあなたがたのただ中にあっては登らない。あなたがたはうなじを固くする民なので、わたしが途中であなたがたを立ち滅ぼしてしまわないようにするためだ。」 (33:1～3)

——— 悪い知らせ (33:1～6) ———

(1～3 節) 金の子牛の事件の後、主はモーセに 1～3 節のみことばを語りました。それは「約束の地に行きなさい」という、命令でした。しかし、そこには厳しい条件が示されていました。民にとっては悪い知らせです。

- ① 主は主ご自身の代わりに主の使い（天使）が民を導くと言うのです。
- ② 主ご自身は「あなたがたと共に上らない」と言われました。その理由は
- ③ 主が共に行くならば、汚れた民は滅ぼされるかも知れないからでした。

——— 主のあわれみ ———

主は、アブラハム、イサク、ヤコブに誓われた「あなたの子孫を豊かに祝福する」という約束を果たされるお方です。しかし、民の罪ゆえにその実行方法を変更される事もあります。主は「わたしは共に行かない」と言われました。でもこれは、主の憐れみから出たことばでした。聖なる主の臨在は、悔い改めない者にとっては焼き尽くす火です。従って、主ご自身が共に行かないと言われたことは、皮肉ですが、滅びから免れるということで、これは主の憐れみから出たことばでした。

——— 民の決断 ———

(4 節) 「民はこの悪い知らせを聞いて嘆き悲しみ、一人も飾り物を身に着ける者はいなかった。」主が共におられない。これは最悪でした。

なぜでしょう？イスラエルが主の民であるのは何によるのでしょうか。イスラエルが主の民であるのは、主が彼らと共にいて下さるからです。こうして、彼らが地上の全ての民と区別される特別の民となるのです。主が共にいてくださらないイスラエルなど、塩気を失った塩のようなものです。何の役にも立たず、外に捨てられて踏みつけられるだけです。

(マタイ 5:13) 「あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にもたたず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです。」

私たちも、主にはっきりと従うためには、今すぐにでも世俗的な生活を捨てなければなりません。塩気を取り戻さなければなりませんね。

(5 節) 「主はモーセに次のように命じておられた。『・・・今、飾り物を身から取り外しなさい。そうすれば、あなたがたのために何をするべきかを考えよう。』」

金の子牛を作ったからと言っても、民は神様への愛を失ってはいませんでした。ですから、

この知らせを聞いて悲しみました。彼らは、その悲しみのしるしとして、身に着けていた飾り物はずし、2度と身に着けることはしませんでした。喪に服したのです。

私たちもある時は、神様にはっきりと従うためには、まず世俗的な生活に、見切りをつけないければなりません。はっきりと捨てることは必要な事です。(6節)「それで、イスラエルの子らは、ホレブの山以後、自分の飾り物を外した。」彼らは塩気を取り戻せたでしょうか？

——— 会見の天幕を宿営の外に (33:7～11) ———

民の信仰はいつも、ゆれ動いていました。しかし、モーセの信仰は不動でした。この箇所にはモーセの日ごろの信仰生活が書かれています。

(7節)「さて、モーセはいつも天幕を取り、自分のためにこれを宿営の外、宿営から離れたところに張り、そして、これを会見の天幕と呼んでいた。・・・」

いまや、目に余る偶像礼拝によって汚された宿営の中では、モーセが神様と会見することは、もはや不可能でした。この時、まだ幕屋は建てられてはいませんでした。そこで、モーセは自分の天幕を取り、宿営の外に張りました。彼と他の人々も、神様と会見する場所とするためでした。「会見の天幕」これが、やがて、幕屋の名称となりました。

(11A節)「主は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。・・・」この場所は、主の臨在の場所となりました。モーセには、他の者達には許されなかった神様との直接の交わりが、許されました。モーセは顔と顔を合わせて神様と交わる事が許されたのでした。(民数記 12:8)「彼とは、わたしは口と口で語り、明らかに語って、謎では話さない。彼は主の姿を仰ぎ見ている。・・・」神様はモーセをこんなにまで信頼されておられて、人が友に語るように、親しく、はっきりと語られたのでした。

(9節)「モーセがその天幕に入ると、雲の柱が降りて来」ました。モーセと神様が交わっている時です。ヨシュアはこの様子をしっかりと見ていました。

(11B節)「・・・モーセが宿営に変えるとき、彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が天幕から離れないでいた。」ヨシュアはモーセが神様と交わっている「会見の天幕」その場所から、離れませんでした。天幕の中は見えませんが、彼は主の臨在を深く体験していました。やがて、このヨシュアが、次の指導者として、指名されるのでした。

ある婦人は、家でも祈る事は出来たのですが、彼女は大切な祈りをする時はいつも、わざわざ教会にきてお祈りをします。ここが彼女の「宿営の外、宿営から離れた所の、会見の天幕」でした。

さて、皆さんの会見の天幕はどこにありますか？毎朝の書斎、台所、居間のソファー皆が寝静まった布団の中でしょうか？ 私たちもひとり静かになれる、時と場所を聖別し、主のみことばを受ける事、祈る事に励みましょう。私たちが、そこに行く時、主が臨在され聖書のみことばによって語りかけて下さいます。

——— モーセ、第3のとりなし（12～17） ———

さて、会見の天幕で、モーセは祈りました。イスラエルの民に「約束の地に向かって進め」と言われた神様でしたが、ご自身は一緒には行かないと言われました。そこで、もう一度、民のためにとりなしの祈りをしました。主ご自身が民と一緒に行って下さることを求めました。

（12、13 節）モーセは祈りました。「私は、あなたのお心にかなっていると言われている者でありながら、あなたがしようとしておられる事がよくわかりません。あなたの道は人の道と異なり、あなたの思いは人の思いより高いからです。」

（イザヤ 55:8, 9）「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——主のことば—— 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」 「ですから、どうか、あなたの道を教えて下さい。この民が、あなたの民であることは心に留めておいて下さい。あなたの民なのですから、あなたの臨在、同行なしで、約束の地に行くよりは、この荒野に留まっている方が、良いのでしょうか？」

天使が何人遣わされるよりも、一人の神様がおられる方がはるかに良いのです。今、モーセは、いかなるプレゼントよりも神ご自身をいただきたいと願っているのです。イエス様も言いました。（ルカ 11:13）「天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてくださいます。」

主はモーセの願いに答えられました。会見の天幕での祈りの勝利でした。

（14 節）「主は言われた『わたしの臨在がともに行き、あなたを休ませる。』

私たちにとっても、**最大の恵みは神の臨在**です。神様から恵みをいただくことではなく、神様自らをいただくことなのです。

——— 主の人、ブラムエルの祈り ———

偉大なる説教者ブラムエルの話です。主の人ブラムエルは、ある集会に招かれ、奉仕する前、一室に閉じこもって時間になっても出て来ませんでした。係りの者がそっと様子をうかがうと、彼は熱心に神様に祈っていました。「あなたがこの集会に来て下さらなければ私は行きません。」繰り返し、繰り返し祈っていました。やがて、彼が出てみことばを語りますと、それは両刃の剣よりも鋭く、大きな御霊の働きが、その集会の上に現れたのでした。

——— あなたの栄光を見せてください ———

（18 節）「モーセは言った。『どうか、あなたの栄光を私に見せてください。』」ここでなぜ、モーセは「栄光を見せてください」と言ったのでしょうか？ 以前、彼は見ていたはずです。

（16：7、8 節）シンの荒野で食べ物がなくなった時、主は民の不平を聞かれて「夕方には肉を、朝には天からマナを降らせ、エジプトの地から民をここまで導かれた主の栄光を見る」と約束しました。そして 8 節です。「・・・彼らが荒野の方を振り向くと、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。」

更に（24:17 節）「主の栄光の現れは、イスラエルの子らの目には、山の頂を焼き尽くす火

のようであった。」モーセはこの様に、今まで何回か、主の栄光を見ていたはずでした。

しかし実際に、モーセが今までに見て来たものは、主の姿らしいものでした。

ここで、モーセが願っていたことは、すべてのベールを取り去った主の姿でした。

今、主は民と共に行くと言われました。きっとモーセは臨在の主の姿を確認したかったのでしょう。それが18節のことばとなりました。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」

しかし、結論から言いますと、モーセは、神のみ顔を見ることは許されませんでした。許されたのは、主の後ろの姿を見ることまででした。罪人は、正面から 神様のみ顔を見ることは許されていません。

——— み顔を見ることは許されなかった ———

(20～23 節、読む) 今、神様はモーセに「岩の上に立て」と言われました。

主は、モーセの前に現れると言われました。しかし、「わたしの栄光が通り過ぎるときには、わたしはあなたを岩の裂け目に入れる。わたしが通り過ぎるまで、この手であなたをおおっておく。」モーセが主を見て死なない様にです。主はモーセを守られました。岩の裂け目に入れて守られました。やがて、主が通り過ぎた後、「わたしが手をのけると、あなたはわたしのうしろを見る・・・」と言われました。かろうじてこの時、初めてモーセは主の後姿を見る事が出来ました。

人間には主を全部真正面から見ることは許されていません。つまり、全部見ることは出来ないのです。ここに人間の限界が示されています。モーセも例外ではありませんでした。

この岩がキリストならば、私たちは、ただキリストにあってのみ、私たちをすべて焼き尽くす、神様の栄光の炎から守られます。こんなに近く主が迫っていても死ぬことはありません。そして、キリストに守られて、キリストを通して初めて、主の栄光をうしろからですがみることができます。背後からですが、私たち満足しなければなりません。

イエス様は、お弟子さんに言われました。「わたしに従って来なさい。」弟子たちはイエス様に従いました。弟子たちはいつも先を歩まれる、イエス様の後ろ姿を見続けました。主の後姿から学び続けました。

私たちも主に従いましょう。主を追い越してはいけません。高慢になってしまいます。離れ過ぎてもいけません。見失ってしまいます。主の一步後ろを歩みましょう。

聖書のことば。「私はほめたたえます。助言を下さる主を。実に 夜ごとに内なる思いが私を教えます。私はいつも 主を前にしています。主が私の右におられるので 私は揺るがされることがありません。」(詩篇 16 篇 7、8 篇)